

## 機は熟すソサイエティ制

副会長 辻井 重男



振り返れば長い道程であった。ソサイエティ制導入の検討は1980年から、諸先輩によって始められている。そこでは、現在のグループ制は、ソサイエティ制の登山口に至るまでに越えるべき峠として位置付けられていた。

本学会が考えてきたソサイエティ制とは、現在のグループ制より自由度の大きい半独立的な小学会ともいうべき複数のソサイエティの統合体であって、小学会の持つ親密さ、小まわりの良さと、総合学会としての視座やプレステージの高さ、スケールメリットなどの利点を併せ享受しようという貪欲な組織である。

本学会は、文字どおり電子・原子のレベルから、人間・社会との接点まで実に幅広い領域をカバーしている。分野が異なれば、論文誌の編集方針や国際交流の進め方など多様なはずであり、横並び的管理はできるだけ少ない方がよい。従って

“ソサイエティ制導入は同質性社会から異質性共生社会への移行”と見ることができる。しかし、ソサイエティ制を専門学会の単なる連合体とするのであれば、総合学会としての存在意義は失われる。“ソサイエティ制は、タコツボ型社会の集まりではなく、一つのササラ型社会である。”

ということができよう。今、流行りの言葉を借りれば、“ソサイエティ制とは自己変革メカニズムを内蔵した自律分散協調システムである”

と定義してもよい。この場合、自律分散性と協調性の絶妙なバランスが要請される。

グループ制も順調に進展して、会員数は4万人に達し、OA化も進んでいる現在、21世紀を指呼の間に望んで、ソサイエティ制実施の機は熟したとの感が深い。

ソサイエティ制は、来年度から、フェーズ1として導入され、メンバー登録や、半独立採算制へ向けての財政シミュレーションが始められる予定である。

最後に蛇足を一つ。

“ソサイエティ制とは、B-ISDNである”  
余白が尽きた。この暗号解読は会員諸賢にお任せしたい。